

# 平成19年伊賀市消防本部の火災・救急救助の概要

## 1. 火災概要

平成19年中における出火件数は61件で、前年に比べ24件の大幅な増加となりました。これは、およそ6日に1件の割合で火災が発生したことになります。

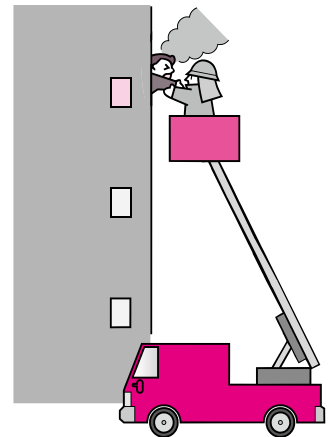
火災種別ごとにその構成比をみると、建物火災33件で全火災の54%と最も高い比率を占めています。次いで、その他火災（道路、空地、土手および河川敷の枯草の火災など）12件で20%、車両火災10件で16%、林野火災6件で10%の順となっています。

出火原因については、第1位は枯草焼き14件、車両の事故等7件、放火・放火の疑い7件、たばこ5件、ストーブ4件の順となっています。火災による損害額は9,748万7千円で、

項目		平成19年	平成18年	増減
火災件数	建物火災	33	16	17
	林野火災	6	3	3
	車両火災	10	13	△3
	その他火災	12	5	7
	合計	61	37	24
焼損面積	建物火災 (㎡)	3,373	315	3,058
	林野火災 (a)	168	10	158
死傷者	焼死者 (人)	2	1	1
	負傷者 (人)	5	2	3
主な原因など	枯草焼き	14	7	7
	車両の故障・事故など	7	10	△3
	放火・放火の疑い	7	3	4
	たばこ	5	2	3
	ストーブ	4	0	4
損害額 (千円)		97,487	41,911	55,576

前年に比べ5,557万6千円と大幅な増加となっています。また、火災1件当たりでの損害額はおよそ159万8千円となりました。

火災による死者は車両火災で1人、その他火災で1人、負傷者は5人です。

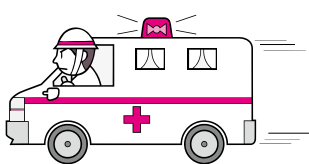


焼損棟数		平成19年	平成18年	増減
建物火災	全焼	9	4	5
	半焼	2	1	1
	部分焼	16	2	17
	ぼや	10	10	0
	合計	40	17	23
罹災世帯	29	4	25	
罹災人員	67	15	52	

## 2. 救急概要

平成19年中における救急出場件数は3,949件であり、前年に比べ467件増加となっています。これは、1日平均約11件出場したことになります。

救急出場件数を事故種別ごとにみると、急病が2,524件で64%と半数以上を占め、次いで交通事故517件で13%、一般負傷511件で13%の順となっています。



搬送人員については3,889人で、前年に比べて521人の増加となりました。これは、管内の住民およそ26人に1人が救急車によって搬送されたこととなります。

救急の概要		平成19年	平成18年	増減
事故種別 (件)	火災	4	2	2
	自然災害	0	0	0
	水難	1	0	1
	交通	517	469	48
	労働災害	68	69	△1
	運動競技	25	21	4
	一般負傷	511	455	56
	加害	20	26	△6
	自損行為	45	60	△15
	急病	2,524	2,191	333
	その他	234	189	45
	合計	3,949	3,482	467

## 3. 救助概要

平成19年中における救助出場件数は58件であり、前年に比べ5件の増加となっています。

救助出場件数を事故種別ごとにみると、交通事故が49件で、全件数の約84%を占めています。

救助の概要		平成19年	平成18年	増減
事故種別 (件)	火災	0	1	△1
	交通事故	49	45	4
	水難事故	2	0	2
	機械による事故	2	3	△1
	建物などによる事故	2	1	1
	その他	3	3	0
	合計	58	53	5

### 【問い合わせ】

- 火災関係 消防本部予防課 ☎ 24-9105
- 救急救助関係 消防本部消防救急課 ☎ 24-9116

※平成19年4月1日から青山支所管内が伊賀市消防本部管轄となり、それ以降の件数が本統計の平成19年分に含まれています。

# 伊賀市第3回「読書感想文コンクール」

上野図書館で募集した読書感想文コンクールに、市内の小・中学校、高校および一般の皆さんから合わせて326点の応募がありました。その審査結果と特選作品をご紹介します。

【問い合わせ】 上野図書館 ☎21・6868

## 審査結果 (敬称略)

特選	第1部	第2部	第3部	入選
◆◆◆	◆◆◆	◆◆◆	◆◆◆	◆◆◆
〔第1部〕(高校生・大学生・一般)	〔第1部〕(小学生)	〔第2部〕(中学生)	〔第3部〕(小学生)	〔第1部〕
石橋容子 (一般)	森永侑樹 (成和中3年)	岡森峻一郎 (古山小6年)	福沢義男 (一般)	青山愛 (上野高校1年)
栗原理 (三田小3年)	西田千尋 (玉滝小3年)	市橋日向 (上野西小4年)	清水祥太郎 (崇広中2年)	宮本真帆 (上野高校1年)
楠本海斗 (府中小3年)	竹原茉優 (壬生野小3年)	森永元希 (古山小4年)	藤山雅士 (丸山中2年)	五嶋亜友美 (霊峰中2年)
垣内政真 (久米小2年)	松生野莉 (猪田小2年)	竹矢真優 (青山小4年)	五嶋亜友美 (霊峰中2年)	廣岡和佳 (神戸小1年)
松生野莉 (猪田小2年)	栗原理 (三田小3年)	藪中柚輝 (依那古小5年)	城陽介 (西柘植小1年)	
栗原理 (三田小3年)	楠本海斗 (府中小3年)	岡田亜子 (上野西小6年)		
栗原理 (三田小3年)	楠本海斗 (府中小3年)	安田一貴 (上野東小6年)		
栗原理 (三田小3年)	楠本海斗 (府中小3年)	福井花奈 (花之木小6年)		
栗原理 (三田小3年)	楠本海斗 (府中小3年)	松田崇志 (府中小6年)		
栗原理 (三田小3年)	楠本海斗 (府中小3年)	山根奈生子 (府中小6年)		
栗原理 (三田小3年)	楠本海斗 (府中小3年)	北原麻乃 (府中小6年)		
栗原理 (三田小3年)	楠本海斗 (府中小3年)	川部晃典 (中瀬小6年)		
栗原理 (三田小3年)	楠本海斗 (府中小3年)	加藤沙苗 (友生小6年)		
栗原理 (三田小3年)	楠本海斗 (府中小3年)	高田真太郎 (依那古小6年)		
栗原理 (三田小3年)	楠本海斗 (府中小3年)	藤室真央 (依那古小6年)		

## 〔第一部〕心に日向を求めて

一般 石橋 容子さん

人間は人知れず悩み、苦しむ。そして、それらから何とか解放されたい。そう願うことが、なんともいじらしく可愛らしい。その救われた安堵感を心の中にほっこりと日向のように持って生きる存在を私は『日向』という作品に登場する「私」に見つけた。

たらされるのが興味深い。幼い時、両親や家を失って他家に厄介になっていた頃に、人の顔色ばかりうかがっていたから、この癖がついたのではと自己嫌悪を感じているのである。

ところで、私の癖はどうだろう。私の長年の癖は爪を噛むことである。指の先端はぎざぎざで、断面はささくれだっている。深爪が普通の状態である。伸びて白くなった爪の先端を見ると噛まずにはいられない。落ちつかない。

今思い返してみると、この爪は幼少時の自分の姿、心の在り方そのものだったのかなという気がしてくる。ぎざぎざして、ささくれている。何か満たされなくて、自分の最も身近な部分を噛む固い感触で注意をそらせていたのだろうか。私はそんなに寂しかったのか、かわいそうかと想像はナルシストの域まで達してしまう。

加えて、情報が多い現在だ。私に聞きかじった心理学、占いや行動学の知識が侵入してくる。「癖から分かるあなたのタイプ」「こんな行動を示す相手との交渉術」等は最近よく見る本のタイトルや雑誌の小見出しだ。そこで私は「爪を噛む癖のあなたは、甘えん坊で、欲求不満」などと私のことを知るはずもない記者の記事を読む。自分のたくさんある性格のその部分だけクローズアップし、鵜呑みにする。その結論に合う適当な理由をくつつける。かくして、安易な自己分析は完成だ。しかし、これでは自分の内面をつかむには適切ではないだろう。

それにしても、私も「私」も出してとらえることのできない内面に理屈をつけ自己認識をしたい。自分の癖を特別なものと感じ、そこに何らかの意味付けをしたい、自分にも愛着をもつ人間の性格のようなものを感じる。なのに自分のことを愛せない自分、肯定的に見られない自分がいた。「私」は孤児故に、卑屈なのだとして自己否定する。悩み逡巡する「私」を見て、当の私はふっきた。客観的だと見えなくなる。そして「私」と私に

言いたくなる。「かけがえのない自分だから、そのままでもいい」と。

さて、私以外にも「いいですわ」と「私」に返す人物が作品にいた。恋仲の娘である。

「私」に顔を見られた娘は持ち上げた袂を下ろして「私」の視線を受けようと軽い努力をする。「私」は「私」で娘を見まいとして眼を向けた日向が記憶を呼び起こす。

「私」は両親の死後、祖父と二人で暮らしていた。盲目の祖父は明るさを感じる南の日向ばかり見る。「私」も、相手が盲目だから、視線を気にせず、その顔を上げしげと見ていることが多かったのだ。それが人の顔を見る癖になつた秋の砂浜の日向が思い出させてくれたのだ。

夏より確かに日射しの緩む秋の日、「私」は心を解放させて浜辺から反射する光に目を細めるようにして記憶を手繰り寄せたのではないか。それまでに何度もしたように。そして、自分が孤児として育つたために卑屈な精神をもつてしまったのだという結論が出ないことを祈りながら、必死で。

だから、祖父との記憶を思

い出した時、どんなにか嬉しかっただろうと思う。こんな小さなことがとてつもないことで人は悩む。私は自分の悩みや他人の苦しみに「私」のように丁寧につきあつてきただろうか。そこは違う。

ところで、なぜ今回は「私」は答えを見出せたのだろうか。私は娘のおかげだと思ふ。自分を愛して、顔を見てもいよと妙な癖までも受け止めてくれる娘を得て、「私」は自分に自信を持てたのではないか。その余裕が正しい記憶を呼び寄せた。またたとえ他人の顔を窺う自分だったとしても「安心して自分を哀れんで」やることができるのではないか。人は他人に愛され、自分を愛するようになる。次に、その気持ちは他人を幸せにしたい原動力になる。「私」は「娘のために自分を綺麗にして置きたい心一ぱい」になつていたので、癖を巡る悩みから脱出できたのだ。

実は、私もだ。家族を持つ際、爪を噛む癖を持つつきやすい私は自信がなかった。こんな私にも我が子は「好き」と言ってくれる。「私」も私も心中の日向を抱えて生きて

〔第2部〕  
「蜘蛛の糸」を

再読して

成和中学校3年

森永 侑樹さん

「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼつて来た。下りろ。下りろ」この言葉を思い出すたびに心が締めつけられるような気がした。どうしてこんな言葉が使えるのか。どうしてここまで自己中心的になれるのか。僕には、解らなかつた。この本をもう一度手に取るまでは。

この物語は、一言で言えば、「応報」だと思ふ。相手の事を考えた善い行いをすれば、それは自分の身に良い結果として返ってくるという事、逆に自分勝手な醜い行いをすれば、それもまた自分の身に悪い結果として返ってくるという事を健陀多の過去と現在の行動の違いを通して訴えかけている作品と言えるだろう。この物語には、二人の健陀多が登場する。一人は過去に蜘蛛を助けた心やさしい健陀多。もう一人は自分だけ地獄から抜け出たいという醜

い心を持った健陀多。言うまでもなく、この二人は同一人物である。だが、なぜこまごまで行動に違いがあるのか？僕は次のように考える。第一に二人の健陀多の置かれていた状況が違うということだ。置かれていた状況が違えば、心境にも違いが出るのは明白だろう。そのことから僕は、地獄から抜け出すか、もしくは、再び地獄に落ちるかという極限状況に置かれることで、健陀多は醜い心を露にしたのではないかと推測する。すなわち、本当の健陀多は後者であるということになる。また、前者は心の中に醜さを宿した偽善者であつたということにもなるだろう。健陀多は、昔助けた蜘蛛の細い細い糸をのぼつて一人だけ地獄から抜け出そうとしたが、他の罪人たちもその糸をのぼつてきた。切れて自分まで落ちてしまふと焦つた健陀多は文頭の言葉を発し、その結果、蜘蛛の糸が切れ、再び地獄に落ちてしまふ。これが健陀多の行く末である。ここまで言うと、健陀多は悪者であるとか、地獄に落ちて当然だと思ふかもしれない。僕も再びこの本を読み返すまでは、そう思つてい

た。しかし、今度は自分をその状況に置き換えてみた。もし自分が、生きるか死ぬかの極限状況に置かれた時、本当に人を思いやる優しい心を忘れずにいられるだろうか？僕は戸惑つてしまふ。蜘蛛の糸をのぼつていて、下からくる他の罪人に気付いた時の健陀多には、二つの選択肢があつただろう。一つは、この時の健陀多のように、自分ひとりでも切れるかもしれないのだから自分だけは助かりたい、と他の罪人を振り落とす。もう一つは、自分だけでなく皆が助かればいい、糸は切れてしまふかもしれないが、自分だけ助かることなどできない、と皆でのぼる。この二つだろう。が、僕たちは、はたして後項を選べるだろうか？「人間は、欲のかたまりだ」という言葉を聞いたことがあるが、本当にそうかもしれない。もしかすると、人想いの行動でさえ欲からきているかもしれない。ならば、本当の思いやりなど存在するのか？僕は、わからなくなつてしまふ。そう考えていると、僕は一つの出来事を思い出す。それは八年前のことだ。僕には「おばあちゃん」が二人いた。

一人は僕の祖母である。もう一人は祖母の祖母であり、その年で103歳になる長寿の「おばあちゃん」である。僕は大きい「おばあちゃん」の事をそのまま「おつきばあちゃん」と呼んで慕っていた。僕は夕食後、決まって「おつきばあちゃん」の部屋へ行った。そして「おつきばあちゃん」の膝枕で寝る、これが僕の楽しみだったのだ。僕が来ると、忙しくても座って、笑って僕を招いてくれた。膝を枕に寝ころぶと、僕の背中をさすってくれた。とても温かかった。そんな事が今思いつかれた。なぜなら、その温かさは、今思えば欲からきているものではなく、本当の思いやりからきていると確信できるところである。言葉さえなかったのに、背中をさする手からは、優しさが溢れ出しているような気さえたのだ。しかし「おつきばあちゃん」は、二年前に他界した。喋ることができなくなるまで「ありがとう」という言葉を忘れなかった。僕は「おつきばあちゃん」のおかげで本当の思いやりの存在を知ることができた。今までの僕なら極限状況に置かれた時、悪を捨てき

れなかっただろうと思う。おそらくどんな人間の心の中にも悪や欲、醜さは存在しているのだろう。実力が物を言う社会、どうにか楽をしたい、ライバルを蹴落とすことばきないか、そういうった考えから心の中の悪の芽は伸びていくのではないかと思う。その結果、騙し合い、憎み合って生きている。

しかし、今の僕には確かな希望の光が見える。本当の思いやりを信じ、そのすばらしさを誇れる自分がある。その違いは、本当の思いやりを実際に受けてきたかどうかである。僕は考える。本当の思いやりを受けることで醜い心は晴れわたるのだ。そして今、僕のように思いやりを受けた人が、健陀多の蜘蛛の糸より太く、温かい思いやりの手をとくさんの人々に差し延べていくべきと僕は思うのだ。

【第3部】

二十一世紀に生きる

君たちへ

古山小学校6年

岡森 峻一郎さん

ぼくは、今、二十一世紀を生きています。もし、司馬遼

太郎先生から「二十一世紀とは、どんな世の中でしょう」と聞かれたら、どう答えればいいのかでしょうか……

この本を初めて読んだとき「難しいな、よく分からないう」というのが正直な気持ちでした。同時に、「分かりたい」という気持ちが強くわいてきました。何度も読み返していきうちに、司馬先生からのメッセージが伝わってくるように感じ、いくつもの心に響く言葉に出会えました。

中でも「人間は自然によって生かされている」「自分に厳しく、相手にはやさしく」という言葉が、ぼくの心にしんときました。

ぼくたちは、当り前のように空気を吸い、水分をとり、大地の上で生きています。自然によって生かされているなどという事は忘れ、感謝することもなく、ただ、大きな天災が起きたときだけ自然の偉大さに恐れを感じるのです。自然によって生かされている……当り前すぎて忘れていた大切なことを気づかせてくれました。

また、「人間は支え合って生きている。助け合う気持ちが大切だ」と書いてあります

た。ぼくも、その通りだと思えます。だからこそ、自分に厳しく、相手にはやさしくできるような人にならなければいけないと思います。本当にみんなが、そんな気持ちになれたら、人類が仲良く暮らせる時代が、きっと来るはずですよ。だけど今は……

先生は、「人間は決しておろかではない」と記されていますが、ぼくは、そうなのだろうかと疑問に思います。日々、ぼくたちの耳に飛びこんでくるニュースはいい事ばかりではありません。自然に対して、人間こそ一番らしい存在だといばかりかえっている人が、またたくさんいますし、自分のことも相手のことも大切にできない人がいっぱいいると思うからです。

先生、残念ながら、二十一世紀の始まりは、先生の望まれるような時代にはなっていないと思うのです。

今回、この本を読んだことで、すごく大きなものと出会えたように感じます。過去、現在、未来、さまざまな時代について考えてみることでできました。ぼくらは、過ぎ去った歴史を変えることはできないけれど、新しい歴史を創る

ことはできます。今という時代も過去になり、歴史の中の一ページとなるのです。次の時代の人たちに歴史のバトンをつなぐため、今、ぼくたちが何をしなければならぬのかを教えてくださいませんか。

最後に先生は「たのもし君たちになれ」とおっしゃいました。ぼくたちに託されたこのメッセージを受けとめ、ぼくは、「たのもしいほく」になるために訓練し、努力していきたくと思います。そして、いつか司馬先生に、「二十一世紀は、良い世の中になってきました」と、胸を張って伝えられるように……。

